第3報　附中から附高への6か年の学習成績変化の追跡（その2）

―― 39年度入学者の成績変動の分析を中心に ――

戸苅　進・服部晴子・鈴木陽子

要　旨　研究の見通しのための，定性的な第2報の方向が，定量的取り扱いの価値も十分との結論の上に立って，今後数年は継続して取り組む計画の下に，本年は，昭和39年度に中学に入学した生徒の英・数と全科の成績変動の資料を整理した。

はじめに

中学入学から高校卒業までの中等教育6か年にわたる，学業成績の各個人についての変動はいろいろであり，中学入学後，卒業に至るまで引きつづいて優秀な成績を示すものもあれば，入学当初は優秀であっても，次第に下降するもの，あるいは逆に，はじめは劣っていても次第に上昇するもののあることは，われわれの経験からも十分予想されうる問題である。

それは，高校在学中についても同様である。

さらにまた，中学と高校とを関連づけて考えても，その関係は考えられる。中学入学以来優秀な成績であ

第1表　附中→附高進学者の成績変動（数学・英語）

中学入学年度			39（44年度高卒）				40（45年度高卒予定）				41（46年度高卒予定）				合計		
			男		女		男		女		男		女		男	女	計
			実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	%	%	%
中1↓中3	数学	不変	13	36	12	40	9	31	7	25	11	32	17	63	33	42	38
		上昇	5	14	6	20	1	4	2	7	6	18	1	4	12	11	11
		下降	5	14	0		10	34	12	43	3	9	3	11	18	18	18
		小変動	13	36	12	40	9	31	7	25	14	41	6	22	37	29	33
		大変動	0		0		0		0		0		0				
	英語	不変	10	28	4	13	7	24	18	64	13	38	11	41	30	39	34
		上昇	4	11	2	7	6	21	2	7	6	18	3	11	16	8	13
		下降	3	8	7	23	2	7	1	4	5	14	6	22	10	17	13
		小変動	17	47	17	57	14	48	7	25	9	27	7	26	41	36	39
		大変動	2	6	0		0		0		1	3	0		3		1
中3↓H2	数学	不変	9	25	4	13	8	28	5	18					26	15	21
		上昇	0		0		3	10	4	14					5	7	6
		下降	8	22	15	50	0		2	7					12	29	20
		小変動	14	39	6	20	16	55	17	61					46	40	43
		大変動	5	14	5	17	2	7	0						11	9	10
	英語	不変	16	45	14	47	7	24	10	36					35	42	38
		上昇	4	11	1	3	1	4	1	4					8	3	6
		下降	4	11	6	20	13	44	11	39					26	29	28
		小変動	12	33	9	30	8	28	6	21					31	26	28
		大変動	0		0		0		0								

り，それが高校卒業までつづくもの，または，中学では優秀であったが，高校では下降するもの，あるいはまたその逆のもの，中学，高校ともに劣っているもの等々である。

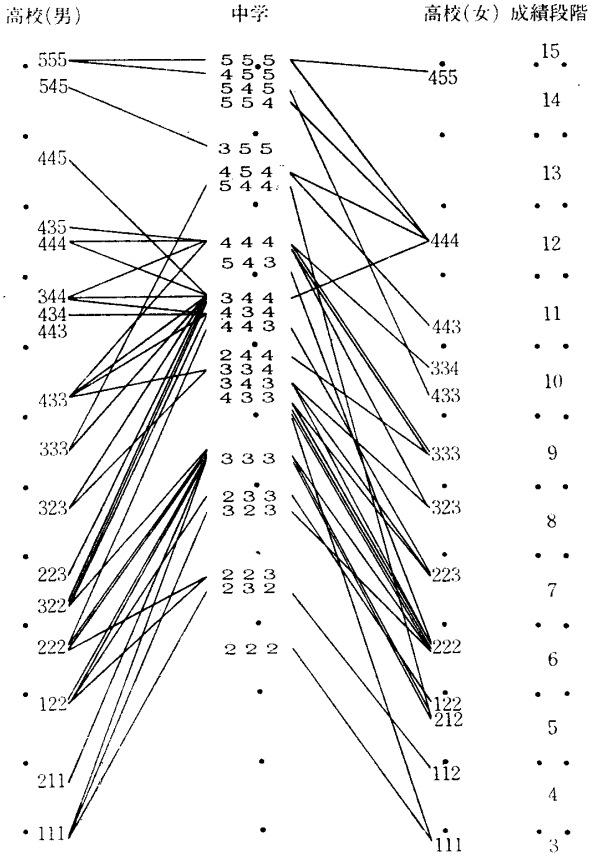
全教科の総合成績についてのこの面の研究は，既に元本校の校長であった大西先生の御研究(1)があるが，特にわれわれの経験から感覚的に大きく変動が見られるのは，数学と英語であるので，昨年のような定性的な処理に較べれば，大変な仕事ではあるが，それを試みる価値は十分に感じられるので，本年度は先づそれから手をつけることにした。

1 附中より附高への進学者の英・数の成績変動

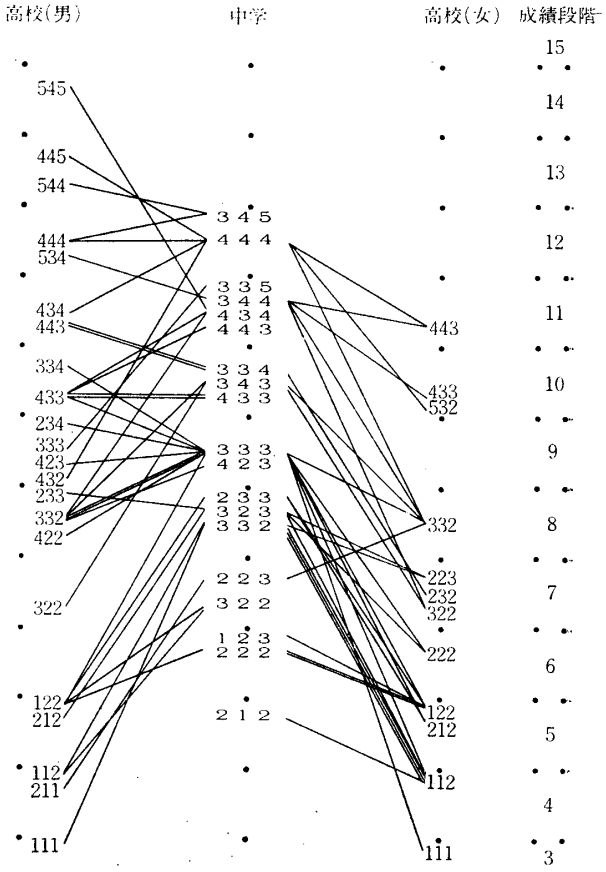
調査の対象としては，本研究の中心である昭和40年度の中学入学者と，それをはさんだ前後の昭和39年および41年度入学者をとり上げることとし，資料としては，学年内の変化もなるべく反映させるように，また，学年成績は5段階評定になっているので，誤差をなるべく少なくする目的で，各学年の第1学期と第2学期の成績の代数和を用いることとした。

そうして，それらの変動を見るために，それぞれの生徒が，各学年において占めた位置を大西先生の方法に従って段階づけた。即ち，段階は5段階とし，各学年の平均得点を中心として，±0.5S.Dの範囲内にあるものを3の段階とし，さらにそれよりプラスとマイナスの方向へ1S.Dの範囲内にあるものをそれぞれ4と2に，更にそれを越えたものをそれぞれ5と1の

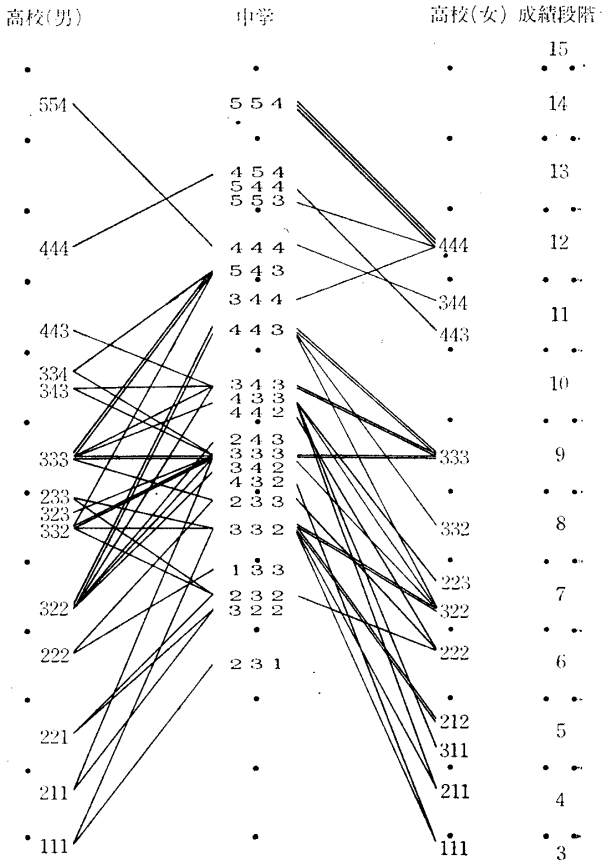
39年度入学者成績の変動(全科)



39年度入学者成績の変動(数学)



39年度入学者成績の変動(英語)



第3表 高校の成績段階（全科）

	中1時代の評価 1	2	3	4	5	中2時代の評価 1	2	3	4	5	中3時代の評価 1	2	3	4	5
15				1	1					1					2
14			1							2 1					1 1
13			1						1					1	
12			1 1	2 1	2				3	4				3 3	1
11			1	3 1				2	2	1				4 1	
10			2	2 1	1			2	2 2					4 1	1
9		1 1		2 1					2 3					2 3	
8			2 1	1				1	1 2				1	2 1	
7			4 1	1 2				2 1	3 2				1 3	4	
6		1 1	2 3 1	2	1		1 2	2 3 1	2				1 4	6	
5		2 1	2 2		1		1	3 3	1				4	3	
4			1 1					1 1				1 1			
3		1 1	2	1			1 1	2 1				1 1	2 1		

第4表 高校の成績段階（数学）

	中1時代の評価 1	2	3	4	5	中2時代の評価 1	2	3	4	5	中3時代の評価 1	2	3	4	5
15															
				1				1						1	
13			1	1					2					1	1
			2	1					3					2	1
11			2	1 1				2	1 1					3 1	
			2 1	4 1				5	1 2				5	1 2	
9			2	2				3	1				1	2	1
		1	6 3	1 1			2 1	4 1	1 3				7 3	2	
7			1 6				1	3 1	2			1 1	3	2	
			2				1	1					2		
5		1 2	4 3	2			3 3	2 4				2 2	3 5		
		1 1	2 5				1 2	1 1	4			2 4	1 2		
3			1 1					1 1				1	1		

第5表 高校の成績段階（英語）

	中1時代の評価 1	2	3	4	5	中2時代の評価 1	2	3	4	5	中3時代の評価 1	2	3	4	5
15															
				1					1					1	
13															
				1 2	4				1 1 1	4				1 2	4
11			1	1	1				1 2				1		2
			3		1			2	2				4		
9		1	2 4	3 2				3 2	3 4				6	6	
		1	5	1 1				5	2 1			4	3	1	
7		1	3 3	2 3				2 5	4 1				2 6	4	
	1	1 2		1				2 2	1				2 2	1	
5		2	1 2	1				3 3				3 2	1		
			2 1	1			1	1 2				1 1	1 1		
3		1	1 1	1				2 2			1	1 2			

第2表 高校の成績の中学の成績との比較

		数学	英語	全科	計
男	上昇	13	12	10	36
	下降	23	24	26	
女	上昇	1	3	1	30
	下降	29	27	29	

段階とした。以上の段階値をもとにして，成績変動を次の4種に類別した。

1) 不変型：成績段階が，3カ年を通じていつも同じもの，たとえば，1・1・1，3・3・3，5・5・5，など。

2) 上昇型：1年時の成績段階値の2倍よりも，2，3年時の段階値を合した方が2以上上昇しているもの。たとえば，1・2・3，2・3・3，3・4・5など。

3) 下降型：1年時の成績段階値の2倍よりも，2，3年時の段階値を合した方が2以上下降しているもの。たとえば，2・1・1，3・2・1，5・3・5など。

4) 小変動型：以上以外のものを含む。したがって変動はするけれども，1年時の成績段階値の2倍よりも2，3年時のそれを合した方が1だけ上昇あるいは下降しているもの。たとえば，1・1・2，3・4・3，2・1・2，4・4・5など。したがってここには，上昇的傾向のものも，下降的傾向のものも含まれている。ただその傾向が顕著でないというだけである。

ただし，昭和40年度入学者は，現在高3在学中であるので，高校の成績変動については中3・高1・高2の成績変動をとって，39年度との比較を考えることにした。

以上のような類型に従って，中学から高校にわたる学業成績の変動を示したのが，第1表である。

これだけの資料では決して断定的なことは言われないが，少なくとも

次の2点だけは注目してみる価値があると思う。

(a) まず，大西先生による全教科総合の資料では，3年次にわたる資料で例外なしに言うことのできた，中学・高校ともに不変型が最も多いということが，少数の例外を除き数学・英語ともに小変動型が最も多いということ。

(b) 次に，中3から高2への変動の比較において，39年度の例では数学で上昇型が0で，最大なのは小変動（男）または下降型（女）であったのに対し，40年度の例では下降型が0または最少となり，最大なのは小変動型となり，上昇型も決して少なくはないということ。ところが英語においては，上昇型は両年度で大差なく，一方，39年度の例では不変型が最も多かったのに対し，40年度の例では下降型が最も多くなっているという事実である。

Ⅱ 39年度中学入学者の成績変動

上の結果から考えると，数学・英語・全教科についての，更に詳しい分析的な資料は，今後の研究の基礎としても，また早い段階での軌道修正的な進路指導のためにも重要なものであることが判ってきたので，本年度は先づ39年度中学入学者の成績変動についてまとめることにした。

その一つは，数・英と全教科について中学段階での成績変動型と高校での成績変動型との男女別に整理した関連図表である。第1～3図がそれで，真中の数字は中学3年間の成績変動，左はそれが高校ではどのような変動型をとったかを男子について，右のは女子について示したもので，線1本が生徒1人に対応する。

なお型を示す数列は左から右に，それぞれの段階での1～3年の成績に対応し，右側に示した成績段階の数字は，1～3年の成績段階を示す数字の和であり，同じ成績段階では高学年になる程成績上昇の型を上位に配列した。第2表は，この3つの図から判明した。中学より高校に進むにつれて成績上昇の傾向の者と下向の傾向の者の実数をまとめたものである。

もう一つの，3～5表は，中学のどの学年あたりで，高校の成績が，どの段階あたりにしぼられてゆく可能性ないしは危険性が予見できるかを考えてみるための資料としてまとめたものであり，横軸には中1～中3での成績評価，縦軸には高校の成績段階値をとった。なお表中ゴチック体の数字は男子を表わす。

以上2種の資料だけでも，かなり興味のある，また指導上有益な仮説が考えられそうであるが，与えられた紙数に限りもあることであり，詳細は，40年度中学入学の，45年度の卒業生についての資料も整った次の紀要の方に譲りたいと思う。

おわりに

今後の計画として，40年度，41年度入学者の資料の整理を進めると共に，英・数についてはその成績の大勢の決定が高校ではなく，中学段階にあるらしいことが十分に考えられるので，この面の掘り下げも進めてゆく所存である。

文献 (1) 高須照夫ほか
長期観察指導 第1報
名大教育附中高紀要 第15集
(2) 大西誠一郎
附属中高校6年間の学業成績の推移
名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）1964